

# うたとかたりの対人援助学

## 第6回 「浦島太郎」はなぜめでたいか

鵜野 祐介

### 動物報恩の昔話「浦島太郎」

卒業論文でトルストイ民話の教育学的意味について取り組んで以来、「昔話とは何だろうか」と折に触れて問いかけてきた。最近是这样考えている。「昔話は『かかわりの物語』である。親子の、子どもと大人の、男と女の、里人と山人や海人との、金持ちと貧乏人との、正直者と欲張りとの、人間と動物や異類との、動物同士の…」(拙著『昔話の人間学』2015年、231頁)。

さて、「対人援助(human service)」という立場から「かかわりの物語」としての昔話について考えてみる時、まず思い浮かぶのが、主人公が施した善行に対して、相手が恩返しをするという「報恩」のモチーフである。相手として動物が登場することが多いため、こうした話は「動物報恩譚」と呼ばれる。代表的なものとして「鶴の恩返し(鶴女房)」「狐女房」などがあるが、今回は「浦島太郎」を取り上げてみたい。

### 教科書の「浦島太郎」

子どもたちにいじめられていた亀を助けてやった浦島太郎は、その恩返しとして亀の背中に乗り、海の中にある竜宮に連れて行ってもらった。竜宮の乙姫はご馳走やさまざまな遊びを見せて楽しませてくれるが、やがてうちに帰りたくなった太郎がそう告げると、乙姫は土産に玉手箱を手渡す。その際「どんなことがあつ

ても蓋を開けてはなりません」と言うが、故郷に帰ってみると両親は亡くなっており、自宅も村の様子もすっかり変わっていたため、落胆した太郎が玉手箱を開けると、箱の中から白い煙が出て白髪のお爺さんになってしまう。

この話は、1910(明治43)年発行の国定教科書『尋常小学国語読本』巻三(二年生前期用)に「ウラシマノハナシ」として登場して以来、戦後になっても教科書に掲載されてきた。

また、1911(明治44)年『尋常小学唱歌(二)』に掲載された唱歌(作詞は乙骨三郎とも言われる)は、学校の教室だけでなく、お手玉唄やまりつき唄として家庭や路地での遊びの中でも歌われてきた。おそらく50代以上の多くの方が口ずさめるだろう。「1. 昔々浦島は／助けた亀に連れられて／竜宮城へ来て見れば／絵にもかけない美しさ(後略)」

「浦島太郎」の話は口承の昔話や伝説として語られたり、絵本になって読まれたりもしたが、そのあらすじは、伝説として残る一部地域のものを除けば、国語や唱歌の教科書版とほとんど同じであり、現在知られている話は、これら教科書版によって親しまれてきたと言える。

### 巖谷小波の「浦島太郎」

教科書版の元となったとされるのが、1896(明治29)年に巖谷小波が『日本昔噺』シリーズ

の一つとして発表した「浦島太郎」である。主人公の名は「浦島太郎」、丹後国（現在の京都府）水の江の漁師で両親と暮らしている。教科書版との違いは、こちらは丹後地方の伝説とされていること、竜宮（城）が海の中ではなく海上の島にあること、そして最後に「玉手箱」の蓋を開けて白煙が立ち昇り、白髪のお爺さんになった後、唱歌のように「あけて悔しき」とはせず、「めでたしめでたし」と幕引きされていることである。一体何が「めでたし」なのだろうか。亀を助けたことに対する報恩譚の結末としてはどうにも収まりが悪い。その理由を探るべく、浦島説話の歴史を繙いてみたい。

#### 『日本書紀』の浦島説話

現存する最古の浦島説話の古典資料は、『日本書紀』（720）で、雄略天皇二十二年の条に以下のように記述されている。「秋七月に、丹波国の余社郡の管川の人、瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。使に女に化れる。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相遂ひて海に入る。蓬莱山に到りて、仙衆を歴り観る。語は、別巻に在り」。

冒頭文が示すように、これは「昔々あるところに」という「昔話」ではなく、丹波国（715年に分割され「丹後国」となる）余社郡管川に実在したとされる人物・瑞江浦嶋子の「伝説」である。浦嶋子が大亀の姿になっていた女性と結婚して、竜宮城ではなく、蓬莱山（常世の国）に行き、「仙衆」にめぐり合ったと述べられるが、その後については触れていない。ここには、主人公が亀を助け、その恩返しがなされるという「報恩」のモチーフはない。

女性は亀に変身することのできる女神とされ、女神信仰の影響が見られる。また「仙衆」は神仙思想における不老不死の仙人たちを指し

ており、亀が女性に変身する例が中国の魏晉南北朝の志怪小説『搜神記』や『志怪』等に見られることから、この話には中国の文化、特に神仙思想の影響が見て取れる。

#### 『丹後国風土記』（逸文）の浦島説話

次に、現存する文献資料としては鎌倉中期のものしか残っていないために「逸文」と付される『丹後国風土記』の中に収められている、715年頃に成立したと推測される浦島説話を見ていこう。こちらも丹後国と謝郡日置里筒川村の伝説で、主人公の「嶋子」は、五色の亀に変身する女性「亀姫」と結婚し、「蓬山」という島で3年を過ごす。これは人間界での300年に相当していたため、帰還した後、故郷の変わりように悲嘆した嶋子は、「決して開けるな」と言われていた玉匣を開けると、亀姫と思われる「芳蘭しき躰」が風雲に乗って蒼天に昇っていく。嶋子は涙ながらにそれを見送る。ただし、白髪の老人になつたり死んでしまつたりはしない。本話も動物報恩譚ではなく、女神と人間の男との結婚すなわち異類婚姻譚である。

#### 『万葉集』の浦島説話

783年頃までに大伴家持等により編纂されたとされる現存最古の歌集『万葉集』に、上述した2つの「丹後系」とは異なる浦島説話が載っている。舞台は「住吉」で、摂津（現在の大阪府）の住吉大社付近と考えられる。主人公は「浦島子」で、「海若の神の女」と結ばれて、不老不死の常世の国である「海若の宮」へ案内される。亀は出てこない。ここで3年を過ごした後、帰郷した世界では垣も家も里も見当たらない（具体的な年数は明示されず）。悲嘆した浦島子が「開けるな」と言われていた土産の「玉篋」の蓋を開けると、白雲が常世の国の方に棚引い

て消え、彼の肌は皺だらけになり、髪も真っ白になって死んでしまう。玉篋の中味が彼自身の「年魂」であつたことを暗示させる。

以上、8世紀に成立した3つの浦島説話の結末は三者三様だが、共通するのは、主人公の男が水界の女神もしくは神靈性を備えた女性との結婚という「異類婚姻」のモチーフを持っている点である。そしてその背景には女神信仰や神仙思想、さらに人間以外の動植物や目に見えない存在にも魂があり心を通わせることができるとする「アニミズム」的世界観が窺える。

#### 『御伽草子』の『浦島太郎』

話の趣きが大きく変化するのは室町時代、「御伽草子」の版である。「御伽草子」とは、広義には室町時代に成立し庶民の間に広まった短編物語を指すが、狭義には江戸時代になってこれらが木版印刷されたものを指し、特に大坂の渋川清右衛門が享保年間(1716-1736)以前に刊行した23編が「渋川版御伽草子」と呼ばれる。『浦島太郎』もその中の一つで、原本は室町時代に成立したと考えられている。

主人公は、父母を養う24~5歳の貧しい漁師「浦島太郎」で、釣り上げた亀を「長寿のめでたい動物だから」と海に放してやると、亀は女に変身して小舟で迎えに来る。ここではじめて「動物報恩」のモチーフが出てくる。ちなみに亀を海に放して生かしてやるという「放生」の行為は仏教思想の影響とされる。二人は舟で10日ほど航海して、海上の島である「竜宮」に到着する。

「亀」は神仙思想に類縁性を持つ陰陽五行思想における「四神」の一つ「青竜」として登場するが、仏教においても天人や夜叉、阿修羅などとともに、天竜八部衆の一つとして位置づけられており、インド原住民の間で行われていた蛇

神崇拜が、仏教の中に採り入れられたものと考えられている。竜宮には、一度に一年中の四季の美しい眺めを楽しむことができる「四方四季の庭」が存在し、それを見たことが太郎に望郷の念を呼び起こさせるが、この庭もまた仏教的淵源があると指摘されている。

明治期教科書や口承の昔話に見られる、子どもにいじめられている亀を買い取って助けてやるという形ではないが、動物の愛護を推奨している点では同じである。また主人公を貧しい家の親孝行の働き者として設定し、竜宮を去ることを決意した理由も両親のことが心配だからとしている点も合わせて、儒教道徳的な色合いも感じられる。

竜宮での3年が人間界での700年に相当しており、絶望した太郎は土産の「玉手箱」を開けると、前述の『万葉集』版と同様に、中身は太郎の「年魂」で700歳の老人となる。ところがこれで終わらず、太郎は鶴になって空へと飛んでいく。すると竜宮の亀も神として現われ、「夫婦の浦嶋明神」となって「めでたしめでたし」と結ばれるのである。これなら「めでたし」にも納得がいく。主人公は神様になったのだから。

前述した8世紀成立の3つの説話が、女神との婚姻と離別を主題とする異類婚姻譚であつたのに対し、室町時代に成立した「御伽草子」版では、女神との婚姻が永遠に成就されるという形の「異類婚姻」となり、さらに「動物報恩」のモチーフが加わっている。

ちなみに、鶴と亀がめでたい動物とされるのは神仙思想の影響であるが、この物語の結末が浦嶋明神の成立であるとすれば、これは寺社の成立を語って説経を行う「本地物」と呼ばれる物語と考えられ、「御伽草子」版には、土着の民俗信仰を取り入れながら広まっていった室町期の庶民的な仏教文化も投影している。

### 異類婚姻から動物報恩へ

そして巖谷小波の「浦島太郎」では、前述したように、浜辺で子どもたちがいじめていた亀を、金で買い取って助けると、翌日、実は竜宮の乙姫に仕える身であった亀を助けたお礼として、乙姫が太郎を竜宮に招く。ここには女神(異類)との婚姻というモチーフは見られず、子ども読者に動物愛護の心を説く「報恩」のモチーフが基調となる。また、亀は「御伽草子」版では乙姫の化身であったが、ここではいわば「乙姫のお抱え運転手」のような存在であり、神仙思想における靈獣としての姿は見られない。

何よりも大きな「御伽草子」版との違いは、最初に述べたように、「玉手箱」の蓋を開けて白煙が立ち昇った後、鶴に変身することも、亀が出現することも、明神として土地の守護神となつて祀られることもないまま、白髪のお爺さんになったことを「めでたしめでたし」として幕引きされている点である。

この話の主題が「異類婚姻」であるならば、異類との結婚が主人公に様々な困難をもたらすも、これを克服して幸福を獲得することが「めでたしめでたし」にふさわしい結末だろうし、主題が「動物報恩」であるならば、助けてやった動物の恩返しによって主人公が幸福を獲得することがその結末となるはずだ。小波版はそのどちらでもない。何故か？

本来、浦島説話は神仙思想・女神信仰・アニミズム的世界観などを背景とする、女神との婚姻と離別を主題とする「異類婚姻」の物語であった。ところが室町期の「御伽草子」版では、仏教的世界観や道徳観に基づく「動物報恩」の要素が加わり、さらに江戸時代以降、娯楽的文芸として親しまれる一方で宗教的な要素が薄れていった(今回は触れられなかったが、江戸時代

にはいくつもの異なる版が刊行されている)。

明治時代に入り、子ども向けのおとぎ話として再話するにあたって、小波は異類婚姻のモチーフを削除し、動物報恩のみを残した。とはいえ、動物報恩はこの話の前半部だけであり、話の筋が持たないため、「箱の中を見てはいけない」というタブーとその侵犯のモチーフは残したが、子ども向けである以上「めでたし」で結びたい。そこで小波は、「めでたい」中身は問わぬまま、半ば強引にこの言葉を添えて締めくくった。以上のように類推される(\*三浦佑之『浦島太郎の文学史』1989、三舟隆之『浦島太郎の日本史』2009 他を参照)。

### 不条理の受容と克服のための物語

一方、浦島説話を水難者の魂が水界に安住の地を見出した物語と読み解くこともできる。古来より、日本人は水の災害や事故に不条理にも幾度となく見舞われてきた。そして、犠牲になった人びとの魂が「異界」としての水界で安らかな日々を送ってほしいとする願望とそれに基づく異界観が、「常若の国」「<sup>とこわか</sup>補陀落浄土」<sup>ふだらく</sup>「ニライカナイ」などと、時代や地域によって名前を変えながら受け継がれてきた。

東日本大震災の後、「行方不明になった家族の死亡届を出せないでいたら何年か経って夢に現れた」、「イタコに死者の霊を降ろす口寄せをしてもらったら『おれは今、海の底にいる。おだやかな気持ちでいるから、もう探さなくていいよ』と言うのを聞いて、ようやく気持ちの区切りがついた」といった話がいくつも報告されている。こうした事実は、「魂の安住の地としての水界」イメージが今日もなお、日本人の精神世界において確かなリアリティをもち続けていることの証左であろう。

浦島説話は今も生きている。